

農業は発展の基盤、食糧問題の解決に挑む

JICAが展開するさまざまな農業支援の中に、2008年からの10年間で、サハラ以南アフリカのコメ生産量増を目指す「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」イニシアチブがある。このプログラムに取り組むのが西田有一さんだ。

中東での紛争復興 農業の大切さを痛感

大学院で開発経済学を学んでいた私は、在学中に日本のアフガニスタン復興支援について知り、紛争からの復興支援に携わりたいと考えてJICAに就職しました。

2007年7月に中東のヨルダン事務所をイラク担当となり、念願だった戦災復興を手掛けることになりました。とはいえ、当時のイラクは治安状況が最悪で、国内に入ることはできず、イラク側の関係者がテロに遭うなど、苦勞の連続でした。ここでの協力には、上下水道・電力といったインフラ復旧支援のほか、紛争で破壊された文化財の保護・修復などがありました。農業支援に初めて本格的に関わったのも、このときです。

イラクはメソポタミア文明発祥の地。その基盤が農業でした。フセイン政権時代までは近代的な灌漑システムを持つ中東有数の農業国でしたが、度重なる紛争と経済制裁で農地が荒廃していたため、灌漑施設の復旧を支援するとともに、ヨルダンに日本の専門家を招き、第三国研修を開催しました。任期の終わりが、ようやく首都バグダッドに入り、研修関係者と再会したときは、感無量でした。

実際に支援に関わって気付いたのは、多くの国が「農業は産業としても、食糧供給

の面でも、国の礎だ」と考えていることです。そこで私はイギリスに留学し、農業開発や食料安全保障、気候変動を学びました。

世界の食料安全保障 多国間協力で生産増加へ

帰国後は、農林水産省の国際部に向かい、主に国連食糧農業機関(FAO)との調整業務を担当し、多くの国際会議に関わりました。FAOが取り組む農業・食料安全保障の課題は、現実には国際貿易の問題とも絡み、さまざまな利害対立があります。そうした利害調整の一端を経験し、日本を含む世界中の人々の健康に直結する食の問題の重要性を改めて強く認識するようになりました。

JICAに戻り、農村開発部に配属されたのは、約1年前。私がいる第5チームは、主にアフリカの稲作分野の支援を担当しています。

JICAは第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)で、サハラ以南アフリカのコメ生産量増を目指す「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」設立を推進しました。これらの国々の多くではコメが主食の一つですが、人口増加に生産が追い付かず輸入せざるを得ません。そこで、同じくコメが主食の日本が音頭を取り、他のドナーとも協力して各国のコメ生産能力を伸ばそうと考えたのです。



JICA農村開発部
農業・農村開発第2グループ
西田 有一
NISHIDA Yuichi

大学院卒業後、2003年にJICA就職。経理部(現・財務部)、社会開発部(現・社会基盤・平和構築部)を経てヨルダン事務所へ。その後、英国大学院に留学して農業を学び、農林水産省を経て2015年から現職。



11月に開催されたCARD総会。アフリカの食糧問題解決は、世界全体の豊かさのためにも避けて通れない

アフリカの食糧問題は、持続可能な開発目標(SDGs)の達成にも直結する重要な課題です。昨年11月に開催された第6回CARD総会でも加盟各国とドナー、民間セクターがコメ増産に向けた課題に協力して取り組むことを確認しました。目標の2018年に向けて、関係者と協力しながらJICAの支援を着実に進めるとともに、将来は農業分野での気候変動への対応にも取り組んでいきたいと思います。



イラク北部クルド地域の農業支援のための現地調査。小麦やヒヨコ豆を栽培する現地農民と西田さん